

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：13801

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720247

研究課題名(和文) 英語と非wh移動言語におけるwh元位置現象に関する比較統語論的研究

研究課題名(英文) A Comparative Syntactic Study on wh in-situ phenomena in English and non-wh-movement languages

研究代表者

小町 将之 (Komachi, Masayuki)

静岡大学・大学教育センター・講師

研究者番号：70467364

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円、(間接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、人間言語の本質的な要因に関わる「移動」という概念の分析を通じて、言語機能の性質を明らかにすることを目的とし、複数の言語におけるwh疑問文の構造分析をすすめることを目指したものである。wh語の顕在的な移動を含む言語と含まない言語における言語資料を収集するために、日本語、英語、ベトナム語における言語資料を収集するとともに、それらの統語的分析を通じて、言語間で異なりうる要因と普遍的な要因を検討し、資料収集だけにとどまらない理論的貢献を目指した。

研究成果の概要(英文)：This study tries to develop syntactic analyses of wh-questions in various languages, in the light of the concept "movement" as an essential component of the human nature. The linguistic data were collected among languages which involve overt wh-movement (such as English), and languages which do not involve overt wh-movement (such as Japanese and Vietnamese). Beyond that, syntactic analyses has been given to the data, and factors which can be attributed to the universal, and factors which can parametrically vary among languages have been proposed.

研究分野：英語学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：wh疑問文 生成文法 比較統語論 言語機能 句構造

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「普遍文法に対する原理とパラメータのアプローチ」(Chomsky 1981)に基づく比較統語論の観点から、ヒトという生物種に固有の言語機能の性質を明らかにするプロジェクトの一環である。本研究の代表者も、自身の科研費プロジェクト(平成20~21年度、若手研究(B))「英語・日本語・中国語における寄生空所を含む文の派生に関する理論的研究」等を通じてwh疑問文の多様な例を分析してきた。その過程で、「文のある構成要素が、意味役割を担う位置とは異なる位置で発音される」移動と呼ばれる人間言語の基本的特質が極めて広範囲にわたって見られることを確認した(Komachi 2008, Komachi 2010)。しかし逆に、その性質が限定的にしか観察できないこともまた知られている。例えば、英語の疑問文は、wh移動規則によりwh語を文頭に動かす必要がある。それにもかかわらず、以下の(1)や(2)に例示される通り、wh語が移動の元位置で発音されるというwh元位置現象が見られる。

- (1) A: John bought an apple.
B: John bought what?
- (2) Who bought what?

(1)は会話の中で相手のセリフの一部を聞き返す場合に見られるいわゆる問い返し疑問、(2)は単文に複数のwh語がある多重疑問文の例である。移動の一般性が機能していないように見える例において、文がどのような派生をもつのかを探究することで、移動の背後にある人間言語のメカニズムに対して、これまでとは異なる視点から、さらに深いレベルまで迫ることができる。

wh元位置現象の説明には、大きく分けて2つの可能性が考えられる。1つは、目に見えないレベルでの移動を仮定することであり、もう1つは、wh移動とは異なるメカニズムを仮定することである。どちらの可能性がより妥当かを調べるには、個別言語内において関連する現象との比較も重要であるが、wh移動に関わる様々な要因を統制した調査を行うためには、英語のようなwh移動言語における資料だけでなく、日本語やベトナム語といった非wh移動言語における資料を収集して、その背後にある規則性を比較することが有用である。

特に、非wh移動言語において重要な要因として、(3)の日本語の例で下線を付されている疑問文マーカーが挙げられる。

- (3) 太郎は何を買いましたか？

疑問文マーカーの分布は、図1にあるように、wh移動の分布との間で相補的である。したがって、この要素が非wh移動言語においてwh移動の代わりを果たし、wh移動と何らか

の関わりをもつという説明も考えられる(Watanabe 1992)。しかし、日本語と同じく疑問文マーカーを有するベトナム語では、移動を示唆する統語的テストである島の制約(Ross 1967)への違反を示さないという点で日本語とは異なるという報告もあり(Tsai 2009)。現在までのところ、wh元位置現象への包括的な説明は得られていない。

	wh 移動	疑問文マーカー	島の制約
英語	+	-	+
日本語	-	+	+
ベトナム語	-	+	-

図1 疑問文にかかわる諸要因の言語間比較

2. 研究の目的

以上の研究背景を踏まえて、本研究では、英語・日本語・ベトナム語の3言語間における比較を通じて、言語機能の性質を探ることとした。特に、1)各個別言語におけるwh元位置現象が認められる構造的条件はどのようなものか、2)それらの構造条件とwh移動の規則はどのような関係にあるか、3)個別言語に特徴的な要因と言語間に共通する要因はどのように区別するか、に焦点をあてて調査を行う。研究の現状を踏まえると、英語・日本語については多くの観察と分析が提出されているが、ベトナム語については言語事実を確実に認定することが特に重要である。そこでまず、ベトナム語の疑問文が英語・日本語のものと同様に似ており、どのように異なっているのか、各言語を母語とするインフォーマントの協力のもと、原典にもとづく文献調査、及び母語話者との面談等による言語調査を行い、言語事実の認定を行う。その言語比較の結果に基づきながら、従来、英語と日本語の比較を中心に発展してきた理論的諸提案・諸分析を再検討し、言語知識の中核に帰すべき原理と言語ごとに異なり得るパラメータについて明確な、言語機能のモデルを提示することを目指した。

3. 研究の方法

本研究は比較統語論の観点にもとづく個別言語間の比較を通じて、言語機能の性質を明らかにしようとする試みである。そのため、対象とする構文に関わる諸要因が異なる複数の個別言語を比較することで、多様な検討が可能となることを見込める。しかし本研究ではそれだけでなく、個別言語内においても、対象とするwh疑問文と理論的に関連付けら

れる他の構文との比較も考慮に入れ、それによってより立体的に人間言語の本質に迫ろうとした。個別言語内において関連する構文の微妙な相違点に着目しながら英語・日本語・ベトナム語の間での比較を行うことで、言語間の比較においてもより多くの要因を統制することができ、wh 元位置現象の背後にあるメカニズムの多角的な検討が実現できるものと見込んだ。

4. 研究成果

英語では疑問詞 (wh 語) が文頭への移動 (wh 移動) に従うとされているが、英語の中にも移動に従わずに元位置で発音される現象が見られる。本研究ではこのような wh 元位置現象を取り上げ、その背後にある仕組みの解明を通じて、「移動」という人間言語の基本的特質と考えられるものについて、その適用範囲の限界と、それが関わる他の諸要因との関係性を明らかにすることを目指した。調査対象とした言語は、wh 移動規則を有する英語にとどまらず、wh 移動規則を有しない日本語およびベトナム語を含め、これらの比較研究を通じて、原理的な説明を試みた。

資料収集にあたっては、予想できなかったいくつかの障害により、予定を大幅に遅らせることとなったが、各言語について順次取りかかり、分析の材料としての言語資料を蓄積することができた。これらの言語資料は、未発表のものを含めて、引き続き理論的に検討していく必要がある。分析をすませたものの一部は出版されたが、たとえば、句構造の一般理論に関する理論的検討を行い、英語の知覚動詞を含む文がもつ構造を手がかりに、英語の句構造は、Chomsky (1994) の提案する裸句構造理論の単純な仮定によって説明することができることを論じた (小町 2014)。

前述の通り、本研究は、「普遍文法に対する原理とパラメータのアプローチ」に基づく比較統語論の観点から、ヒトという生物種に固有の言語機能の性質を明らかにするプロジェクトの一環である。本研究はこのようなアプローチのもとで言語事実の認定を進めていくという記述的な価値があるばかりでなく、wh 移動の有無などの諸要因が統制できる複数の言語の比較を通じて言語機能における原理とパラメータの性質を特定するという点で、理論的な価値を見いだされる必要もある。このような観点から、「原理とパラメータ」の枠組みにおいて、言語機能のモデルをどのように組み込むかを総括し、それが、言語教育など、関連する他分野にどのような波及効果を及ぼすのかを検討した。その結果、言語教育において有効とされるメタ言語意識育成の対象を、言語の生得的でない部分に限ることの有効性を指摘することができた (小町ほか 2013)。

引用文献

- Chomsky, N. (1981) *The Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, N. (1994) Bare Phrase Structure. *MIT Occasional Papers in Linguistics* 5, Department of Linguistics and Philosophy, MIT.
- Komachi, M. (2008) "Across-the-Board and Parasitic Gap Constructions: A Cross-Linguistic Generalization." In Y. Otsu (ed.) *The Proceedings of the Ninth Tokyo Conference on Psycholinguistics*. Tokyo: Hituzi Syobo. pp. 101-110.
- Komachi, M. (2010) "Reconstruction Availability in the Parasitic Gap Constructions and the Nature of Islands." In V. Torrens, L. Escobar, A. Gavarró, J. Gutiérrez (eds.) *Movement and Clitics: Adult and Child Grammar*. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing. pp.28-38.
- 小町将之. (2014) 英語における知覚動詞補部の構造と句構造理論におけるラベル付けの問題. *Ars Linguistica* 20, 1-9.
- 小町将之・磯部美和・大津由紀雄. (2013) 言語獲得. 安藤寿康・鹿毛雅治. (編)『教育心理学』慶應義塾大学出版会.
- Ross, J. R. (1967) Constraints on Variables in Syntax. Doctoral Dissertation, MIT.
- Tsai, C.-Y. E. (2009) Wh-Dependency in Vietnamese and the Syntax of Wh-in-Situ. MA Thesis, National Tsing Hua University.
- Watanabe, A. (1992) Subjacency and S-Structure Movement of Wh-in-situ. *Journal of East Asian Linguistics* 1:255-291.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

小町将之. 2014. 英語における知覚動詞補部の構造と句構造理論におけるラベル付けの問題. *Ars Linguistica* 20, 1-9. [査読有]

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

小町将之・磯部美和・大津由紀雄. (分担執筆) 2013. 言語獲得. 安藤寿康・鹿毛雅治.

(編)『教育心理学』慶應義塾大学出版会.

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

小町将之 (Komachi, Masayuki)

静岡大学・大学教育センター・講師

研究者番号： 70467364

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし